

Vol.5

2010

Si-report

Socio-Intelligence report

専修大学のビジョンと現状



(写真上) 創立130年を迎えた2009年9月16日。創立者のご家族を囲んで。
(写真左) 同日、130年を祝う白い風船が、神田キャンパスから青空へ向け放たれた。

創立150年に向け
さらなる「知の発信」で
専修大学の存在感を示す

学校法人専修大学理事長 専修大学長 日高 義博

本学は2009年9月、創立130年という節目を迎えました。多彩に展開された創立130年記念事業は、いずれも実りあるものとなりました。その豊かな成果は、オール専修の力の結集といえましょう。ご支援・ご協力いただきました関係各位に心からお礼申し上げます。

これから創立150年までの20年間は、まさに大学の新たな形を造る時代であります。生き残りをかけた大学間競争のなかにあって、大学としての品格を保持しながら、「礎固し」と校歌に歌われた人間教育の場を次の世代に渡していくのは、現世代の責務であります。

昨今の大学改革は待ったなしの状況にありますが、さらなる18歳人口の減少をも見据え、骨太の改革を実行することが必要です。とくにこの7、8年の間に教育・研究の人的・物的基盤を確たるものにしていくことが極めて重要です。

本学の21世紀ビジョンである「社会知性の開発」の具現化については、各方面において積極的かつ真摯な取り組みがなされています。2010年4月から新学部「人間科学部」がスタートし、文学部が新学科「人文・ジャーナリズム学科」を含む7学科編成となることも、その一環です。これらの取り組みが、専修大学の躍動に弾みをつけ、幅広い専修人の育成に寄与していくものと期待しています。また、教育・研究の拠点であるキャンパス整備についても、計画的かつ段階的に進めていくことを考えています。

今年度も「学生を基本にすえた大学づくり」を念頭におき、「社会知性の開発」を推し進め、さらなる「知の発信」によって専修大学の存在感を高めていく所存です。

■ Profile

1948年(昭和23年)宮崎県生まれ。70年(昭和45年)専修大学法学部卒業。75年(昭和50年)明治学院大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学。84年(昭和59年)専修大学法学部教授。2004年(平成16年)法科大学院教授。同年学長(現在に至る)。2006年(平成18年)理事長就任(現在に至る)。今村法律研究室長、法学部長、学外では司法試験査査委員、法制審議会臨時委員などを歴任。専攻は刑法学。法学博士。『不真正不作為犯の理論』(慶應通信)、『刑法における錯誤論の新展開』(成文堂)、『違法性の基礎理論』(イウス出版)など著書、論文、翻訳、エッセー多数。居合道5段。



▶▶▶ 建学の精神と21世紀ビジョン「社会知性の開発」

専修大学は、1880年（明治13年）、米国留学から帰国した4人の若者により創立されました。相馬永胤、田尻稻次郎、目賀田種太郎、駒井重格の創立者たちは、明治維新後、米国のコロンビア、エール、ハーバード、ラトガース大学にそれぞれ官費や藩費により留学し、米国の方で「専門教育によって日本の屋台骨を支える人材を育てよう。そのことが海外で長年勉強する機会を与えてもらった恩に報いることだ」と考えました。帰国後、経済学や法律学を教授するため本学の前身である「専修学校」を創立しました。わが国があらゆる分野において新時代を担う人材を求める時代にあって、留学によって得た最新の知見を社会に還元し、母国日本の発展に寄与しようとしたのです。いち早く近代法の考え方をわが国に根付かせようとした本学は、五大法律学校の一つとして重要な役割を担いました。

以後、本学は関東大震災や戦禍などによっても極めて困難な状況に直面しながらも、学窓の灯火を守り続けてきました。21世紀に入った今日においては、私学全体にふりかかる大きな荒波を乗り越え、さらなる発展を遂げなければなりません。常に創立の原点に立ち返り、本学の進むべき指針を熟慮するとき、自ずと道は拓かれます。その指針として、本学は建学の精神である「社会に対する報恩奉仕」を現代的に捉え直した「社会知性（Socio-Intelligence）」の開発を21世紀ビジョンに据えました。社会知性の開発をどのように具現化するのかについては、各学部あるいは大学院の各研究科によつて方法論も力点も自ずから異なりますが、各部局において積極的かつ真摯な取り組みがなされています。



黒門の専修

専修大学の前身である「専修学校」は、明治13年京橋区木挽町（現在の中央区銀座3丁目）に誕生し、明治18年7月神田区今川小路2丁目8番地（現在の神田神保町3丁目8番地）に移転し新校舎を設置しました。この当時の正門が黒渡で塗られた冠木門であったことから、「専修学校」の愛称として黒門と呼ばれましたのであります。黒門は明治40年の校舎改築により姿を消すことになりますが、その名称は現在の専修大学の象徴として生き続けています。

創立130年にあたり育友会のご厚意により、神田キャンパス内に102年の時を経て黒門が復元しました。（写真は、2010年3月に復元された「黒門」と、1885年当時の衣装を身にまとった学生たち）



相馬永胤
(そうま ながたね)



田尻稻次郎
(たじり いなじろう)



目賀田種太郎
(めがた たねたろう)

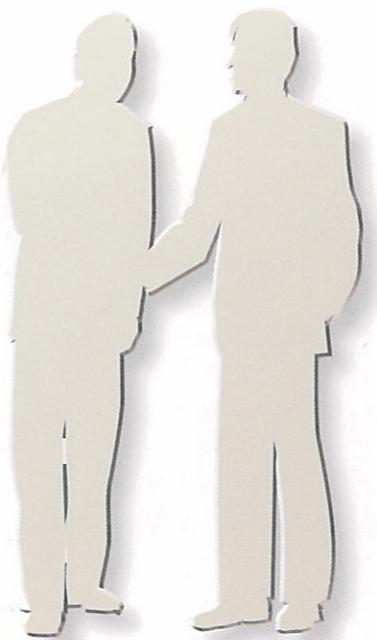


駒井重格
(こまい しげただ)

▶▶▶ 専修大学21世紀ビジョン

21世紀の今日、グローバル化の拡大と異文化交流の進展、情報化の加速、少子高齢化の進行など、我々が取り組まなければならない課題が山積しています。これらの社会的課題を解決するためには、地球的視野から諸問題を捉える力、創造的発想力、さらには深い人間理解や倫理観が求められます。

こうした新時代の社会で求められる知性こそ、「社会知性」と専修大学は考えます。それは、学生一人ひとりが自己実現に生かせる知であるとともに、「専修大学が創り育てる知」でもあります。21世紀において本学は、「社会知性（Socio-Intelligence）の開発」のビジョンのもと、「学生を基本にすえた大学づくり」を念頭に諸施策を推し進め、社会知性開発大学としての道を歩んでいくのです。



専修大学21世紀ビジョン

「社会知性（Socio-Intelligence）の開発」

専門的な知識・技術とそれに基づく思考方法を核としながらも、深い人間理解と倫理観を持ち、地球的視野から独創的な発想により主体的に社会の諸課題の解決に取り組んでいける能力である

『学生を基本にすえた大学づくり』

「社会知性の開発」を目指し、教育・研究の一層の充実に取り組みつつ、「学生を基本にすえた大学づくり」のために全教職員は歩み続けます

目標：さらなる競争力の向上と大学全体の質的レベルアップにより、オール専修大学の総合力で私立大学上位10位以内を目指します

—専修大学は創立130年を迎えました—

創立130年記念式典・祝賀会<10月30日>

創立130年を迎えた本学の記念式典と祝賀会が、2009年10月30日に東京のホテルニューオータニにおいて盛大に開催されました。式典には他大学の学長、理事長など関係者約300名が出席し、川端達夫文部科学相(代読)をはじめとした方々に祝辞を頂きました。続いて行われた祝賀会では、教職員、卒業生、ご父母ら1,000名が参加。鳩山由紀夫首相からのメッセージが読み上げられ、専修大学フィルハーモニー管弦楽団による祝賀演奏や本学と付属校(専大附属高校、専大松戸中・高校)のチアリーダーメンバーのジョイント演舞など披露され、華やかに催されました。



◆日高義博理事長・学長の式辞より

「専修大学の130年の歴史を振り返りますと波乱万丈でしたが、創立者たちの高等教育に対する熱き想いは綿々として受け継がれてきました。この歴史を、一世代30年で区切ると各世代の特色が見えてきます。第1世代は『専修大学の創立の時代』であり、第2世代は『旧制大学の苦難の時代』、第3世代は『新制大学の復興の時代』、第4世代は『大学拡張の時代』、そして現在の第5世代は『大学改革の時代』となります。今、創立130年の節目の年を迎え、次の世代に権力を渡すべく、建学の精神を羅針盤にして大学改革を進めています。



専修大学の教育では、学生には知性を身につけさせ、卒業後には、様々な分野において社会貢献を果たし、社会の骨格となって建学の精神を社会に花開かせることを求めます。一方、大学の研究力をもとに「知の発信」を行い、社会のあるべき姿や方向性を提示し、社会の進展に寄与する責務が大学にはあると考えています。来るべき創立150年に向けて、大学の品格と建学の精神を持って、きらりと光る大学であり続け、次の第6世代に権力を渡すことを誓います。」

創立130年宣言 <9月16日>

2009年9月16日、抜けるような青空の下、本学は記念の日を迎え、神田キャンパスにおいて「創立130年宣言」が行われました。

当日は「宣言」の発表に先立ち、専修大学発祥の地(現在の東京都中央区銀座3丁目付近)から神田キャンパスまで、校旗を繋ぐパレードが行われました。校旗を運ぶのは、本学の功労者に扮した学生たち。相馬永胤、田尻稻次郎、目賀田種太郎、駒井



重格の4人の創立者はもとより、相馬勝夫元総長なども。本学130年の歴史を「創立期」「旧制大学期」「新制大学への復興期」「大学拡張期」の4世代に分け、途中、東京駅前など3カ所のポイントで校旗がリレーされました。各世代の衣装を着た演劇研究会の学生たちを含む約80人が、歴史を踏みしめるかのように、約4kmにわたって校旗を繋ぎました。「創立者たち」によって神田キャンパスまで運ばれてきた校旗を受け取るのは、第5世代を担う日高義博理事長・学長。校旗を手渡され、高らかに「創立130年宣言」を発表しました。

2つの記念日

本学には2つの記念日があります。本学の前身である専修学校の開校式が行われた9月16日を「大学創立記念日」に、創立者の相馬永胤、田尻稻次郎が文部省から教育功労者として表彰された10月30日を「大学記念日」としました。

国際交流協定校学長会議を開催

アジア諸国にある本学の国際交流協定校の学長を迎えて、2009年10月29日、学長会議が神田キャンパス国際会議室で開催されました。

出席したのは、檀国大学(韓国)の張漠星総長、ベトナム国立大学のグエン・バン・カイン学長、ラオス国立大学のスッコンセン・サイヤラート学長。本学からは、日高義博理事長・学長、荒木敏夫副学長の他、石巻専修大学の坂田隆学長も出席。各学部長や本学、石巻専修大学の国際交流センター長らがオブザーバーとして加わり、総勢35人で行われました。



日高理事長・学長は基調講演で、本学の歴史や創立者4人の志を語った後、「社会知性の開発」の理念を説明。「文化の相対性と社会構造の違いを理解し合う『知の連携』を構築し、国境を越えて社会貢献につながる人と学術の交流を促進する原動力」と語り、「社会知性の開発」が果たしうる可能性を強調しました。

張総長は「18歳人口減少による大学間競争は韓国でも同様、私立大学はオリジナル性が重要」と語り、グエン学長は「大学のミッションは世界で活躍する人材の育成」と話しました。2008年度に協定を締結したばかりのラオス国立大学サイヤラート学長は「専修大学の130年の歴史に感銘を受け、両大学が深く、多面的な協力で連携していくことを望む」と語りました。言語や文化の違いを超えて開かれたこの学長会議で、アジア圏域の大学間の連携と絆を深めていく重要性が確認されました。

専修大学創立130年記念 「ベートーベン第九特別演奏会」

創立130年記念に結成された祝祭合唱団と専修大学フィルハーモニー管弦楽団(「専フィル」)による「ベートーベン第九特別演奏会」が2009年12月5日、川崎市のミューザ川崎シンフォニーホールで開催されました。

「専修大学祝祭合唱団」は、学生、ご父母、卒業生、教職員、地元の多摩区民から公募し集まった73人。2009年6月の結団当初、多くのメンバーが未経験者でしたが、发声法、ドイツ語の発音、音楽的表現法などの猛練習に励みました。「専フィル」メンバー100人も、1年半以上にわたり「第九」の準備を重ねてきました。



指揮者には「炎のマエストロ」小林研一郎氏を迎え、ソリストには菅英三子氏(ソプラノ)、谷口睦美氏(メゾ・ソプラノ)、大槻孝志氏(テノール)、青戸知氏(バリトン)。コーラスは、祝祭合唱団に加え、小林研一郎氏が長年指導するアマチュア混声合唱団の武蔵野合唱団100人が共演し180人編成。「専フィル」100人と合わせ、総勢280人の堂々たる演奏となりました。

公演は、ベルリオーズのラコツツィー行進曲(指揮・三河正典氏)の演奏によって幕を開け、日高義博理事長・学長の挨拶、専修大学校歌(指揮・同)の後、いよいよ「第九」(指揮・小林氏)へ。フィナーレの「歓喜の歌」では、大合唱と管弦楽が一体となって会場に響き渡り、1700人の聴衆からは演奏終了とともに惜しみない拍手が送られました。

専フィル

専修大学フィルハーモニー管弦楽団は学生、教職員らにより1972年に発足。約90人が在籍しています。定期演奏会や学内外の依頼にもオーケストラ演奏や室内楽演奏で応え、地元川崎市をはじめ地域の行事にも参加しています。

(撮影は三好英輔 氏)

学生を基本にした大学づくり

～“社会知性の開発”具現化を目指して～

専修大学の歴史と建学の理念を講義で学ぶ

教養特殊講義「専修大学の歴史—日本近現代史のなかの専修大学—」が、生田キャンパスでは2008年度より、神田キャンパスでも2009年度後期からスタートしています。この講義は、日本近現代史の社会や経済、また地域の中における大学の役割という視点で、歴史研究の中に専修大学の歴史を位置づけようとするものです。そして、本学の歴史や建学の理念を学ぶことで、学生に専修大学へのアイデンティティーを持つもらうことがねらいとされています。



講義は全12テーマで、歴史学、経済学、法学、スポーツ、ジェンダーなど、さまざまな分野の教員らが担当。その中のテーマ「建学の精神と大学の未来」では、日高義博学長が講義を行います。「創立期の建学の精神である『社会に対する報恩奉仕』は現在、21世紀ビジョン『社会知性の開発』として生まれ変わった。社会知性とは『社会の中において社会に役立つ知識をつくっていく』ことである。」とは生田キャンパスで行われた第1回講義の中での学長の言葉。学長が大学の社会的使命、専修大学の建学の精神から読み取る理念を、時折問い合わせながら語り、約100人の学生たちは熱心に聴講しました。

2009年度は、この教養特殊講義の他にも創立130年の節目として、創立者4人が学んだハーバード、エール、ラガース、コロンビアの4大学を訪問する「創立130年記念海外セミナー」を学生部が実施。2010年3月7日～15日、8泊9日の日程で21人の学生が参加しました。創立当時の時代背景など事前に学んだ学生たちは、米国留学が創立者たちにもたらした影響、それがどのように自分たちに繋がっているのか、130年の歴史を体感する貴重な経験となりました。

Windows®7搭載パソコンを2000台導入

本学では2010年4月、学生の情報処理教育や研究で使用するコンピューターシステムの端末として、最新OS「Windows®7」搭載パソコンを約2000台導入しました。大学がコンピューター教室用として、この規模で導入するのは全国初であり、学生は最新技術にいち早く触れ、より効果的に学習・研究に活用することができます。また、本学はグリーンIT化にも取り組んでおり、この新システムでは、省電力・低発熱型機器を最大限に活用しています。導入後4年間の省エネ効果は、最大で975トンのCO₂削減(杉の木6万9623本分)などが見込まれています。



Microsoft, Encarta, MSN, および Windows は、米国 Microsoft Corporation の、米国、日本およびその他の国における登録商標または商標です。

新たな学問分野への探求

人間科学部がスタート

人間科学部は、人間の心を研究する「心理学科」と、社会と人間の関係を研究する「社会学科」によって構成され、「実験」や「臨床」などの心理学的手法、アンケートやインタビューなどの「社会調査」の技法を使って、目で見たりすることのできないモノゴトを追体験可能な形で情報化して共有する「実証的」手法を重視し、人間に対する理解を深めます。

「心」と「社会」の研究には、実験や調査、コンピュータによる分析等のスキルが必要です。充実した教員スタッフと実験器具や実習施設、専用のパソコンルームなど、先端の設備が用意され、ゼミナールでは、課題解決型の思考を養うため、少人数教育を徹底します。

文学部に人文・ジャーナリズム学科が誕生

文学部の改組により、新たに「人文・ジャーナリズム学科」が誕生します。実践的なカリキュラムから、語学力・異文化に対する理解・情報を読み解き発信する力を養います。

視点 1

社会知性を育む教育

学生が読み解く戦地からの手紙 兵士たちの「肉声」を次代につなぐ

文学部日本近現代史ゼミナール「軍事郵便」への取り組み

日本近現代史ゼミナール（指導教員：新井勝紘教授）では、2002年から「軍事郵便」への取り組みが行われています。軍事郵便とは、戦地に赴いた兵士と本国の人との間で交わされた郵便物のこと。もっぱら私信ということもあり、日本ではこれまで研究対象として認識されていませんでした。そんななか、新井教授は「軍事郵便を読むことは、歴史的史料を読み取る訓練になる」と、その教育的效果に着目。読み解きに加え、当事者の追跡・インタビューといったフィールドワークにも、学生主導で取り組んできました。軍事郵便と向き合う学生たちの発言からは、歴史認識の深化もうかがえます。



同ゼミの取り組みは、軍事郵便の史料的意義にも光を当てました。2005年7月の企画展示に続き、2009年11月には書籍『ケータイ世代が「軍事郵便」を読む』（専修大学出版局）を発刊。併せて「『いのち』の便り展—兵士のこころと銃後の想い—」を開催しました。2009年度にゼミ長を務めた伴野文亮さんは「兵士たちに対する先入観を覆される、非常に興味深い史料。ぜひ多くの方に知ってほしいと考えた」と、企画にあたっての想いを語ります。

一連の取り組みは全国紙やNHKに取り上げられて反響を呼び、取り組みを知った軍事郵便保有者からは、史料提供の申し出が複数寄せられていること。戦争体験者の高齢化が進み、全国に眠る軍事郵便も散逸の危機にあるなか、同ゼミナールには、歴史の肉声を受け継いでいく機能も期待されています。

シニア世代との交流をもとに コミュニケーション支援ソフトを開発

ネットワーク情報学部 望月プロジェクト

望月プロジェクト（指導教員：望月俊男講師）では2009年度、シニアのコミュニケーションを支援する趣味の活動記録「ほっとりング」の開発に取り組みました。これは3年次生の必修科目「プロジェクト」によるものです。リーダーを務めた若林祐佳さんは「発案当初から、学生のひとりよかれではなく、実際のニーズに基づいたものを作りたいと考えていました。そこで、川崎市を通じて依頼し、地元の老人福祉センターなどへ開発メンバー11人が交代で定期的に訪問。交流を図りながらヒアリングやモニタリングを行い、シニア世代のパソコンに対するニーズを探りました」と経緯を語ります。利用者の目線にこだわり、完成した「ほっとりング」は、シニア世代に喜ばれ高い評価を得ました。



視点
2

知の発信のための研究開発

持続的発展に向けての社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)の多様な構築

2009年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に、社会知性開発研究センター／社会関係資本研究センターの「持続的発展に向けての社会関係資本の多様な構築：東アジアのコミュニティ、セキュリティ、市民文化の観点から」が選定されました。研究代表者は、原田博夫大学院経済学研究科長・経済学部教授で、研究期間は5年間の予定です。



このプロジェクトは、中国（香港を含む）、台湾、韓国、タイ、日本などを対象とした東アジアの社会関係資本の展開を欧米型・日本などとの対比・比較を通じて、「コミュニティ」「セキュリティ」「市民文化」の3分野の観点から総合的に分析し、有機的な認識体系の構築を目指すというもの。学内外の幅広い分野の研究者24人がプロジェクトメンバーとなっています。

このプロジェクトの第1回シンポジウムが2009年12月19日、神田キャンパスで開催され、研究者や学生ら約130人が聴講しました。原田教授は「社会関係資本を3分野に分けて調査・研究を進め、東アジア地域の持続的な発展の可能性と方向性を提示したい」と説明。続いて、コミュニティ分野のチーフである神原理商学部教授、セキュリティ分野のチーフである上田和勇大学院商学研究科長・商学部教授、市民文化分野のチーフである村上俊介経済学部教授が、それぞれ研究の方向性と課題を紹介しました。

◆文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業（2007年度採択）

東アジア世界史研究センター『古代東アジア世界史と留学生』（2007年度～2011年度）
研究代表者：荒木 敏夫 副学長・文学部教授

◆学術研究振興資金（2009年度採択）

フランス革命史料研究センター『ミシェル・ベルンシュタイン文庫』の史料学的研究（2009年度～）
研究代表者：近江 吉明 文学部教授

◆社会知性開発研究センター：学内研究プロジェクト

①都市政策研究センター『工業都市の再生と進化—川崎を機軸とした工業都市の比較研究』（2009年度～2011年度）
研究代表者：宮本 光晴 経済学部教授

②中小企業研究センター『東アジア中小企業比較研究』（2009年度～2011年度）
研究代表者：小林 守 商学部准教授

11号館完成—大学院心理学教育・心理教育相談室を充実—

2009年9月に完成した生田11号館は、主に大学院文学研究科心理学専攻の施設として使用します。市民の方にも利用されてきた心理教育相談室を4、6号館から移転したほか、大小4つのプレイルームや幼児用トイレなども設置され、相談者への配慮が行き届いた施設となっています。



視点
3

社会知性の開発を担う人材の輩出

KSパートナーシップ入試制度利用し社会人学生に

上原 香織さん 川崎市職員／二部法学部法律学科3年次生

川崎市と本学が締結している連携・協力協定「KSパートナーシップ・プログラム」には、川崎市職員を対象とした「KSパートナーシップ入試」制度があり、上原香織さんはその制度を利用して二部法学部へ入学しました。2006年に入学し、高齢者保健福祉行政に携わってきた上原さんは、「入府以来、業務を通じて法律を学びましたが、法律学を専攻してきた同僚との会話では、端々から基礎的な知識の違いを感じていました。私も専大で学び始めてから、上司や先輩の議論に参加できるようになり、理解が深まっていることを実感します。大学で学んだ法律の知識を活かして、意欲的に仕事に取り組みたいと思います」と話します。3年次からは地方自治のゼミに所属し、実務経験を生かして、より専門的に学んでいます。



商店街の活性化を目指し起業へ

一之瀬 卓さん 1996年（平成8年）経営学部卒業

株式会社ipoca代表取締役社長／一之瀬税務会計事務所所長

大学時代は自分で立ち上げたサークル運営を通して組織論に興味を持ちました。「経営組織論」の授業で加藤茂夫教授に出会い、加藤ゼミへ。自主性を重んじるゼミでは、ディスカッションを重ねることで自分の考えが伸びたと思います。また、ゼミで学んだ「ニーズ志向」が現在の仕事でも活かされています。大学の税理士講座では、講師の山田長満先生に出会い、影響を受けました。起業について必要なことなど教わり、現在でも仕事での関わりが続いています。卒業後は税理士になりましたが、商店街の方々との勉強会へも参加し、それがきっかけで（株）ipocaを設立しました。携帯電話による顧客情報管理システムの「タッチャン」を開発し、商店街活性化を目指しています。携帯電話を用いたこのシステムは、2010年3月には大田区ビジネスプランコンテストで最優秀賞を受賞しました。加藤教授や山田先生との出会いをくれた大学には、今後ぜひ恩返しをしていきたいと考えています。



◆ラオスのブアソーン首相に名誉博士称号を贈呈

本学は、ラオス人民民主共和国発展に尽力するブアソーン・ブッパー・ヴァン首相に名誉博士称号を贈呈しました。贈呈式は、2009年5月22日、神田キャンパスで開催。本学が名誉博士称号を贈るのは、同首相で8人目です。

贈呈式には日高義博理事長・学長をはじめ学生や卒業生ら250人が出席。本学のガウン姿で登場した同首相は、会場内から盛大な拍手で迎えられました。日高理事長・学長が歓迎の挨拶を行った後、名誉博士称号を贈呈。続いて行われた同首相の記念スピーチの中では、本学経済学部国際経済学科の授業「海外特別研修」（担当・飯沼健子准教授）により、2005年から毎年、あわせて37人の学生がラオス国立大学と施設内のJICA日本センター（ラオス日本人材開発センター）を視察してきた点に言及し、「専大生は、ラオスとの“民間外交官”としての大切な役割を果たしている」と強調しました。

「海外特別研修」は2009年度も行われ、受講生は9月8日～17日、ラオスを研修訪問しました。その折、現地で同首相との再会が実現。9月11日、首都ビエンチャンの首相府で約1時間にわたって歓談しました。同首相は本学訪問時の思い出を熱く語り、学生たちを歓待。この面会の模様は、現地新聞5紙に掲載され、国営テレビでも放送されました。



「Si-report」とは

「Si」とは……

「社会知性：Socio-Intelligence」の頭文字[S] [I]

と

「SENSHU Intelligence」の頭文字[S] [I]

を表現しています。

専修大学の社会知性をリポートしていきます。



シンボルマーク&カラー

Sの字は専修大学の[S]と21世紀ビジョン「社会知性(Socio-Intelligence)」の開発」の[S]であり、そのSのブルーと曲線は大海原を表します。それが、地球上に見立てた緑の球体を包み込んでいる様は、専修大学で「社会知性」を育んだ人材が世界に輩出され、大海原のように激しく変化する国際社会の波に乗り、世界で活躍する様を表現しています。また、地球を表す球体は、大学のスクールカラーを使用しています。



マスコット

体育会のキャラクターとして使用されているデザインをもとに、より多くの人に愛されるように更にかわいくデザインしました。獅子の顔と鳳凰の羽を配したこのデザインは、若者たちに、無限の可能性を持つ未来へ力強く羽ばたいて欲しいという思いが込められています。

専修大学マスコット
「センディ」

専修大学のシンボルマーク&カラー・マスコットは2005(平成17)年9月に制定されました

専修大学 学長室企画課

(神田校舎) 〒101-8425 東京都千代田区神田神保町3-8
(生田校舎) 〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1
Tel : 044-911-1252 Fax : 044-900-7803
<http://www.senshu-u.ac.jp/>